

# アートから地球環境を考える

——都市再生・地域再生の視点から



社会研究部門 主席研究員 吉本 光宏

mitch@nli-research.co.jp

## 1——社会的課題と対峙するアート

芸術は、今では劇場や美術館で鑑賞されるだけの存在から、社会的な課題に深くコミットするようになってきた。具体的な課題解決のツールとして活用されたり、クリエイティブな発想によって従来とはまったく異なる考え方やアプローチを提示したりすることで、現代社会にイノベーションをもたらす可能性すら広がりつつある。そして、より社会的な存在として芸術が語られるとき、片仮名でアートと記載されることが多くなっている。ニッセイ基礎研Reportでもその潮流をとらえ、これまでアートによる教育や福祉への取り組みを紹介してきた<sup>1</sup>。

都市再生や地域活性化の分野でも、アートはこれまで以上に重要なファクターに位置づけられている。1990年代以降、脱工業化で衰退したEU諸国の重工業都市、港湾都市が、芸術文化やクリエイティブ産業を都市再生の中核に据えて大きな成果をあげている。1995年にチャールズ・ランドリーらは、それをクリエイティブ・シティという概念として提示したが、今やその理念を取り入れた都市政策、地域再生の動きは世界中に広がっている。それらの中には、環境問題に取り組もうとしているプロジェクトも少なくない。

本稿では、国内外の都市再生、地域再生を中心に、地球環境問題を視座に捉えたアートプロジェクトを紹介し、アートを起点とした環境問題へのアプローチを考察したい。なお本稿は、2009年11月に開催された国際会議「Eco Design 2009」で筆者の発表した英論文を和訳し、追加調査などを行って、加筆したものである<sup>2</sup>。

## 2——アートによる環境再生の4つのトレンド

アートによる環境再生として最初に思いつく国内事例は、札幌のモエレ沼公園である。彫刻家イサム・ノグチが基本設計を行ったこの公園は、189ヘクタール、東京ドーム約40個分の広さを持つゴミ処理場を、大地の彫刻、緑の彫刻として甦らせたものである。その規模や壮大さは、圧倒的な存在感を持





モエレ沼公園（写真提供：札幌市）

って我々に語りかけてくる。1988年3月に初めて札幌を訪れたノグチは、同年12月に「全体をひとつの彫刻とみなした公園」のマスタープランを完成させた後、ニューヨークで急逝する。その後ノグチの遺志を継いだ人々の努力によって公園は2005年に完成した。1979年からゴミ処理場の閉鎖された1990年までの間に搬入された廃棄物の総量は、270万トンになるという。

園内のガラスのピラミッドには、公園内に積もった雪を貯蔵し冷房を行う雪冷房システム（CO<sub>2</sub>の排出量を年間30.8トン削減）の他、床吸熱や外気冷房のしくみが導入され、冬期には太陽熱を利用した暖房システムが稼働している。モエレ沼は192万トンの一時雨水貯留池として洪水のセーフティネットとしても機能する。芝生には農薬を使わず、植物系廃棄物は堆肥として再利用され、園内にはゴミ箱を設置しないなど、環境に配慮した公園管理が行われている。ゴミ処理場の再生と環境に配慮した公園づくりを目指した札幌市の行政計画に、「大地を彫刻する」というアーティストの夢が出会ったことで誕生した壮大な環境アート、それがモエレ沼公園である。

しかし今では、アートを活用した都市再生や、環境問題を視野に入れたアートプロジェクトは、モエレ沼公園のように「緑を活用して芸術作品を作る」といった単純な構造にとどまらない。国内外で多様かつ果敢な展開例が見られる。それらを俯瞰すると、①産業遺構や遊休施設のアートスペースへの





ツォルフェライン炭坑。100万㎡の敷地に200棟の炭坑施設が残されている。左手奥の白い建物は唯一の新設施設のデザインスクール（設計は日本のSNA）

転用、②緑化やリサイクルを作品化するアート、③アーティストならではの環境問題へのアピール、④アートを活用した地域再生と環境保全、という4つのトレンドに整理できる。

## 1 | 産業遺構や遊休施設のアートスペースへの転用

20世紀の工業社会において、地球に大きな環境負荷を与えてきた産業群の遺構が、世界各地でアートスペースやデザインセンターに生まれ変わっている。その代表例はドイツ、エッセンのツォルフェライン（Zollverein）炭坑だろう。100万㎡のエリアに200以上の建物、採掘施設を擁するこの炭坑は、バウハウス様式の美しい建築群で、2001年にユネスコの世界遺産に指定された。現在では、敷地のここかしこにイリヤ・カバコフなど著名な現代美術家の作品が設置され、デザインを中心としたアートセンターとして再開発が進められている。

エッセンの立地するルール地方は、炭坑や鉄鋼業が衰退した後、1980年代からI B A エムシャーパーク構想によって、エムシャー水系の自然再生、環境と親和性のある地域再生、産業遺構の文化的な利用などが進められていた。ツォルフェライン炭坑以外にも、北デュイスブルグの製鉄所やオーバーハウゼンのガスタンクなどが、ランドスケープ・パークや文化施設に転用されている。

2010年には、エッセンを代表に53都市からなる地域一帯が欧州文化首都に指定され、ルール2010（R U H R 2010）と題して、芸術文化による大規模な地域再生プロジェクトが展開されている。

他にも、元都市ガス工場の土壌汚染を浄化し、煉瓦づくりの工場を文化的なスペースに転用した西部都市ガス工場文化公園（Westergasfabriek Culture Park）、使われなくなった巨大造船所をアーティストやクリエイターの創造拠点に転用したN D S M（いずれもアムステルダム）、元ノキアの電話線の工場を巨大なアートスペースに転用したケーブル・ファクトリー（ヘルシンキ）など、EU各国には同様の取り組みが広がっている。

日本でも、紡績工場を劇場やギャラリーに改装した「金沢市民芸術村」、元銀行や倉庫をオルタナティブなアートスペースに活用した横浜の「BankART1929」、元日本海軍の赤煉瓦倉庫をアートスペースとして活用する「赤煉瓦倶楽部舞鶴」など、遊休施設を芸術活動の拠点に転用する例は全国に広がっている。環境負荷の軽減につながる遊休施設の再利用はアートの分野に限られたことではないが、一見廃墟に見える建物をクリエイティブな空間に転用していく智恵やアイディアは、アーティストやクリエイターならではのものである。

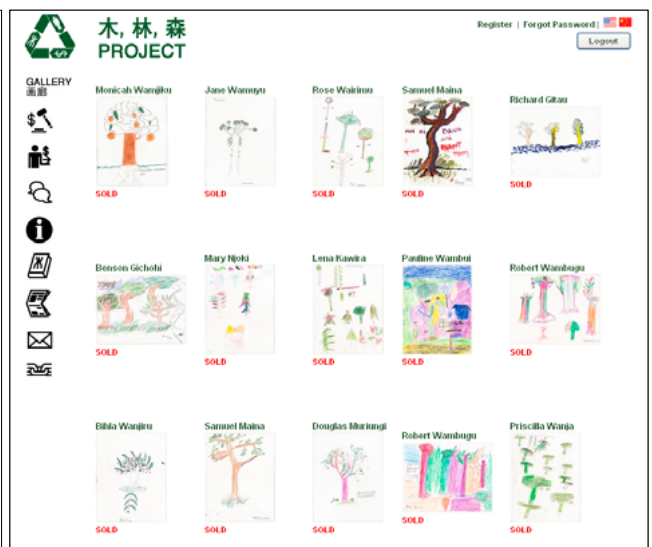
## 2 | 緑化やリサイクルを作品化するアート

緑化事業やリサイクルプロジェクトを作品化するアーティストも少なくない。例えば、ダブリンのバリマン地区では、スラム化した公共住宅の再開発にあわせて、ブレイキング・グラウンドというパブリックアートのプロジェクトが実施された。その中で、仏アーティストのヨッヘン・ゲルツ (Jochen Gerz) は、植樹事業を《amaptoicare》というアート作品として展開した。植樹は住民の寄附によって実現するしくみで、彼は、植樹の寄附をした住民に、“If this tree could speak, what should it say for you?” という質問を投げかけ、住民の話から散文作品を創作してプレートに刻んで樹の根元に設置している。

右の写真の例では、「植樹した若い樹木と2歳の姪っ子シアラが、この町でともに成長し、このライムの木がバリマンに美と未来をもたらしますように」といった内容が刻まれている。荒廃した街に暮らしてきた住民

の記憶や住宅の再生に向けた希望を、植樹事業と結合させることで、樹木の生長と将来の夢を重ね合わせる、というのがアーティストの構想である。

文字にこだわる作品を発表し続けている中国人アーティストのシュー・ビン (Xu Bing) は、サンディエゴ美術館、カリフォルニア大学、国際的な自然保護団体Raretとの共同企画でフォレスト・プロジェクト (Forest Project) を立ち上げ、ケニア山の緑地帯の回復に取り組んでいる。まず、彼の編纂した教科書に基づいてケニアの7歳から13歳までの生徒が授業を受け、人類の生み出した文字の偉大さを学び、その文字を組み合わせて木の絵を描く。子どもたちの作品はインターネット上に公開され、世界中の美術愛好家がオークションで購入し、それがケニア山の植樹資金になるというしくみである。



フォレスト・プロジェクトのホームページから。左のイメージではマウスポインタを動かすことで、絵の一部が拡大表示される。©Xu Bing Studio





藤浩志、Toys Saurus (トイザウルス)、「水都大阪2009」から

ケニアではこの仕組みで集められた資金によって、20米ドルで100本の植樹が可能だという。作家は「生徒たちの希望が作品を通してコレクターのもとに届けられる」「一枚の紙に描かれた木はケニアの大地に根を下ろす本物の木への生まれ変わる」と述べている<sup>iii</sup>。

日常生活から生み出される廃材にこだわってアーティスト活動をしているのが藤浩志である。彼は、ペットボトルを活用して大型のオブジェやカヌーを作ったり、日用品の廃棄物（歯ブラシ、髭剃り、鉛筆、ペン等）で鳥などの作品を制作してきた。彼が立ち上げた「かえっこバザール」は、子どもたちが、遊ばなくなったおもちゃやグッズ、アクセサリなどを持ち寄ってポイントに換え、別のおもちゃと交換するおもちゃの交換、リサイクルシステムである。2000年のスタート以降、年を重ねる度に人気が高まって全国各地で開催されるようになったが、最近では海外でも実施されている。

このアーティストは最近では「カエルシステム」と題して、市民を巻き込んだ作品づくりにも取り組んでいる。カエルシステムが目指すのは、生活廃材を地域活動のツールにかえる、人とまちの関係のあり方を変えることで、一昨年は米国サンタフェ、昨年は大阪で、その考え方に基づいたアートプロジェクトを実施した。写真は、2009年夏に大阪で開催された「水都大阪2009」に出品された作品《Toys Saurus》(トイザウルス)で、赤いおもちゃの廃品やファーストフード店のおまけグッズで製作されている。この作品は、その後大阪市此花区の四貫島商店街、西成区の動物園前一番街の一本線跡地、高松のイイトピアなどでも展示された。作品タイトルにも、現代の大量消費社会に対するアーティストならではのアイロニーが込められている。

### 3 | 氷が燃えている (BURNING ICE) —— アーティストならではの環境問題へのアピール

英国で2003年に始まったケープ・フェアウェル (Cape Farewell) はアートを通して気候変動を考えるプロジェクトである。アーティストや科学者たちが100年前に建造されたオランダの帆船で北極圏に航海し、気候変動が猛威を振るう最前線での体験に基づいて、アーティストならではの表現方法で環境問題の深刻さを訴えようという試みである。これまでに、ローリー・アンダーソン、アントニー・ゴームリー、ジュード・ケリーなど60人以上のアーティストや音楽家、写真家、建築家などが参加し、日本からは作曲家・音楽家の坂本龍一、映像作家の高谷史郎が参加している。ケープ・フェアウェルの創始者デヴィッド・バックランド (David Buckland) によれば、作品には、アーティストの航海での経験と気候変動の問題に対する差し迫った思いが表現されているという。

バックランド自信も写真家・ビデオアーティストで、2004年の北極海への航海で氷山の表面に、

BURNING ICE (氷が燃えている)、THE COLD LIBRARY OF ICE (氷の冷たい図書館—地球の歴史が何万年にもわたって保存されているという意味が込められている：筆者注)、NAKID BODIES RELEASING STEAM CLIMATE FORCING MELTING ICE (むき出しの(氷の)身体が蒸気を発し、気候が氷を溶解させる)、SADONESS MELTS (悲しみが溶ける)といったテキストを映写し、その写真や映像記録を作品として発表している。このテキストは、2003年の最初の探査に参加した米国の作家・詩人のグレート・エーリック (Gretel Ehrlich) が創作したもので、「氷の将来 (The Future of Ice)」という彼女の本の中から抜粋されたものである。

女性アーティストとして初めてターナー賞を受賞したことで知られるレイチェル・ホワイトリード (Rachel Whiteread) は、2005年の探査に参加し、その体験に基づいて、ロンドンのテート・モダンで作品を発表した。それは《Embankment》(土手、堤防)と題され、1万4,000個というおびただしい数の白い箱をテート・モダンの巨大な空間タービン・ホールにうずたかく積み上げたものである。その白い箱は、我々が日常生活

で使う様々な大きさの箱の中に半透明のポリエチレンを流し込んで製作したもので、北極海の冰山と現代の消費社会をダブってイメージさせる。作家はこの作品について「昔からやってみたいと夢見ていたことのひとつは、峡谷を彫刻することだった。ある意味、この作品でそれができたと思う。それは、ちょうど氷河の大平原 (glacial plain) を成形したものかもしれない」と語っている<sup>iv</sup>。

2008年の航海に参加した坂本龍一は、北極圏で採取した音をもとに《the arctic trilogy》という作品を発表した。彼は、2009年のコンサート・ツアーでもグリーン・オペレーションに取り組み、観客からmoreTrees (モア・トゥリーズ) へのサポート基金を募り、CO<sub>2</sub>をオフセットする寄附活動も展開している。2007年に設立されたmoreTreesは彼が代表を務める団体で、四国や九州ばかりか海外でも植樹活動を展開している。ちなみに、5,000円の寄附で日本人1人が1年間に排出するCO<sub>2</sub>の6分の1がオフセットできるという。

ケープ・フェアウェルの展覧会は世界各国で開催されており、2006年のロンドンの自然史博物館での開催にあわせ「BURNING ICE: ART AND CLIMATE CHANGE」というカタログも発行されている。2008年には東京の日本科学未来館でも展示が行われ、その際、トーキョーワンダーサイト (TWS) の主催で「アートと環境との対話」というフォーラムが開催された。TWSはその後も環境問題とアートの関係を模索する催しを続けている。

—昨年開催された「それってゴミ? ~境界に漂うアート。そして社会に漂うゴミたち。~」という展覧会では、前述の藤浩志をはじめとしたアーティストが環境問題を問かける作品を展示し、藤浩志に



大巻伸嗣《真空のゆらぎ スカイライン》 2009年8月1日  
~11月8日 トーキョーワンダーサイト渋谷「絶・景—真空  
のゆらぎ」展でのオープニング・レセプション時の様子  
Photo: Shigeo Muto ©Tokyo Wonder Site



よるワークショップも開催された。『アートによる創造的実践』を通じて、社会におけるアートの価値を再考し、環境との新たな対話の可能性を探る」「アーティストの『技術』や思考法を通じて、社会の価値観や常識を転換させ、環境に対する新たな意識を喚起する」(TWSのHPより)というのがこのプロジェクトのねらいである。

アーティストの大巻伸嗣が2009年にTWS渋谷で行った「絶・景—真空のゆらぎ」という展覧会は、彼がTWSの協力も得ながら、2007年以来「ごみとは何か」という問いかけを起点に取り組んできた「Garbage Project」の集大成的なもので、スラグと廃船や映像を使った展示が行われた。スラグは、すべてのゴミを焼却炉で燃やし尽くした最後に残るもので、それはゴミから人工的に生成されたゴミ、つまりゴミの究極の姿と言える。《真空のゆらぎ スカイライン》という作品は、ギャラリー2階の展示スペースに大量のスラグを持ち込み、展覧会初日に2階の床に穴を空け、1階にスラグを自然落下させた作品で、前ページの写真はその時のインスタレーションの様子である。

#### 4 | アートを活用した地域再生と環境保全

日本のアートによる地域再生のプロジェクトとして、最近、国際的に大きな注目を集めているのが、2000年以降、新潟県十日町市と津南町で3年ごとに開催されている「越後妻有アートトリエンナーレ」、そして瀬戸内海の直島、犬島などで展開されているアートプロジェクトである。

越後妻有地域の現在の人口は約7万8,000人だが、この40年間で約40%減少し、65歳以上の高齢者の割合は25%を超えている。豪雪地帯として知られるこの地域には、美しい棚田や日本の里山の風景が広がっているが、著しい過疎化、高齢化によって危機に瀕している。越後妻有アートトリエンナーレは、そうした状況に現代美術で活力を与えるため、2000年に新潟県の地域活性化事業としてスタートした。その年は、世界32ヶ国、138人のアーティストが参加して、現代美術の作品が里山のあちこちに設置された。4回目を迎えた去年は、過去の作品もあわせて、760km<sup>2</sup>のエリアに約350の作品が展開された。

「人間は自然に内包される」という基本理念のもと「文明が曲がり角を迎えている今、豊かな自然に包まれてある越後妻有の生活＝里山は、地球環境に対する視座を見つめ直し、環境破壊をもたらした近代的パラダイムを変革するきっかけとなりうる」(越後妻有アートトリエンナーレHPより)というのが基本的な考え方である。去年は、50日間で国内外から37万人、域内人口の4倍もの人が詰めかけた。トリエンナーレをきっかけに、地域経済が潤うだけでなく、耕作の継続を断念していた棚田のオーナーが、作品設置をきっかけに耕作を継続するなど、環境保全の効果も生まれている。

2008年には「越後妻有里山協働機構」というNPOが設立され、2009年春から「越後妻有『大地の芸術祭』丸ごと里親プロジェクト」がスタートした。「都市におけるコミュニティや人間本来の暮らし方の喪失、農村における人口流出、高齢化集落、里山の荒廃など、都市と農村の普遍的課題に対し、都市部の企業・団体と里山の集落との新たな関係性を構築し、越後妻有の里の再生を目指す」(同HPより)というのがそのねらいである。企業や団体から里親資金を募って里山の保全を行うしくみで、農村地帯で始まったアートによる地域再生のプロジェクトは、都市部を巻き込んだ地球環境の保全へと発展している。

一方、瀬戸内海の直島、犬島では、ベネッセコーポレーションの主導で、島を活性化するアートプロ



「犬島アートプロジェクト」の「精錬所」

プロジェクトが進行している。安藤忠雄の設計で地中に設置された「地中美術館」をはじめ、三分一博志の設計で犬島の精錬所跡に開設された美術館は、循環型社会をテーマに自然に配慮した環境づくりが行われている。この美術館では基本的に空調は使われず、また、汚水も直接海に流さずに植物の力を借りて浄化する高度な水質浄化システム（Bio Geo Filter）が導入されている。

今年の夏には、「アートと海を巡る百日間の冒険」と題し、「海の復権」をテーマに直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島の7つの島を会場に「瀬戸内国際芸術祭2010」が開催される。「瀬戸内の島々に活力を取り戻し、瀬戸内海が地球上のすべての地域の『希望の海』となることを目指す」プロジェクトは、アートを起点に地球環境への再考を私たちに強く問いかけるものとなるだろう。

### 3—アートが喚起する地球環境問題への警鐘と行動

本稿で紹介した取り組みには、アートを活用しながら環境問題の改善に寄与しようという考え方が底流に流れている。実際に環境負荷の低い建物が実現したり、作品の制作活動が緑化に結びついたりするケースも少なくない。しかし、アートを起点としたこれらの取り組みが重要だと思えるのは、環境問題の改善に向けた実践的な成果よりも、アーティストのクリエイティブな発想が、現代社会の抱え



る地球環境の問題をより深く我々に問いかけている点である。

シュー・ビンのフォレスト・プロジェクトはその典型だろう。ケニア山の緑地帯を回復させるだけでなく、先進国のODAでも実現は十分可能だ。しかし、彼のアーティストとしてのアプローチは、子どもたちの作品をとおして世界中の人々に環境問題への警鐘を鳴らし、作品購入というアクションを喚起して、人々を環境問題の解決に向けた具体的な行動に向かわせる。

途上国と先進国、子どもと大人、経済的に富めるものとそうではないもの、などの間に、地球規模の循環構造を生み出すことで、現代社会に生きる我々一人ひとりに環境問題に対する責任と行動を促しているのである。英国で始まったケープ・フェアウェルの取り組み、あるいは藤浩志が国内外を飛び回って展開するかえっこバザールやカエルシステムなどにも、それは共通している。

個々のアーティストの取り組みは決して大きくない。しかしそこには、対症療法的な環境対策を超えて、地球環境の保全、持続的社會を実現するイノベーションへとつながっていく可能性が秘められているのである。

※本稿で紹介したアートプロジェクトのURL

- モエレ沼公園：<http://www.sapporo-park.or.jp/moere/index.php>
- ツォルフェライン炭坑：<http://www.zollverein.de/>
- ルール2010：<http://www.essen-fuer-das-ruhrgebiet.ruhr2010.de/home.html>
- ブレイキング・グラウンド：<http://www.breakingground.ie/home.asp>
- フォレスト・プロジェクト：<http://forestproject.net>
- 藤浩志：<http://geco.jp/>
- かえっこバザール：<http://kaekko.exblog.jp/>
- ケープ・フェアウェル：<http://www.capefarewell.com/>
- moreTrees (モア・トゥリーズ)：<http://www.more-trees.org/>
- トーキョーワンダーサイト：<http://www.tokyo-ws.org/>
- 越後妻有トリエンナーレ：<http://www.echigo-tsumari.jp/>
- 瀬戸内国際芸術祭2010：<http://setouchi-artfest.jp/>

- 
- i 吉本光宏「アートから教育を考えるー国内外のチャレンジから」(ニッセイ基礎研Report 2007年7月)、柄田明美「芸術文化によるソーシャル・インクルージョンー福祉との連携の事例から」(ニッセイ基礎研Report 2007年5月)
- ii 「Eco Design 2009 (6th International Symposium on Environmentally Conscious Design and Inverse Manufacturing)」で発表した論文「Arts-Inspired Innovation in Urban Regeneration and Regional Transformation—Pursuing Possibilities for the Green City (日本機械学会)」
- iii 福岡アジア美術館、第4回福岡アジア美術トリエンナーレ2009
- iv Cape Farewell, Burning Ice: Art and Climate Change, 2006

